



# COSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙

2015 冬

VOL. 9

## 中越地震から3800日 ～復興しない被災地はない～



—中越地震発災から10年目を迎えた中越地域住民のようす—

### contents

#### 特集 P2-3

「2冊の書籍の発刊にあたって」

中越の10年の歩みを単行本にまとめました

#### シリーズ防災教育の現場から P4-5

第2回 新潟市立 南中野山小学校

「防災」視点に立った「生き方教育」の展開

【シリーズ 人と人】P6 「次世代が描く 集落の未来」畔上 凌・青木 充

【COSSS リレーエッセイ】P7 『震災学習』を考える 長岡震災アーカイブセンター 山崎 麻里子

【コラム 視点防災】P8 「中越沖地震で発揮された「市民力」」【その他】P8 インフォメーション、施設のご案内、会員募集

# 特集① 2冊の書籍の発刊にあたって



中越地震発生から10年。  
 地域はどのように復興に向かってきたのか。  
 地域づくりの実践現場・復興検証の研究現場  
 2つの視点からその歩みを振り返った。



## 二冊の書籍の特徴

中越防災安全推進機構は、中越地震から一〇年を機に、復興の歩みを振り返る書籍を二冊発刊する。一冊は、刊行済みの「震災復興が語る農山村再生―地域づくりの本質―」（稲垣文彦ほか著、小田切徳美解題、コモンズ、二〇一四年一月二三日初版発行）、そしてもう一冊は、

東日本大震災四周年にむけて一五年三月に発刊する「中越地震から三八〇〇日―復興しない被災地はない―」（中越防災安全推進機構、復興プロセス研究会著、ぎょうせい）である。なお、「震災復興が語る農山村再生―地域づくりの本質―」は、「全国農業新聞（一四年一月二八日）」、「月刊ガバナンス―二月号―」、「地方自治 職員研修―二月号―」、「新潟日報（一四年一月二四日）」、「日本農業新聞（一四年二月二日）」、「信濃毎日新聞（一四年二月二日）」、「出版ニュース―一月上・中旬号―」等に取り上げられ、第二九三五回日本図書館協会選定図書にも選ばれた。

中越防災安全推進機構は、復興デザインセンターの前身の中越復興市民会議の復興の議論の場を踏襲した復興プロセス研究会（二〇〇八年四月〜二〇一五年三月）を立ち上げ、現場実践者と研究者による議論を行ってきた。二冊の書籍は、

研究会の集大成といえる。

「震災復興が語る農山村再生 地域づくりの本質」は、現場実践サイドから復興の歩みを振り返ったもので、そこでは復興のプロセス、復興過程の実態、復興の成果、復興の教訓が語られている。またここでは、震災復興に留まらず、全国に向けた農山村再生の明確なメッセージが語られている。

一方、「中越地震から三八〇〇日―復興しない―」は、研究サイドから復興の歩みを振り返ったもので、復興の特徴、復興検証、東日本へのメッセージが語られている。またここでは、多彩な分野の研究者たちが、復興検証のみならず、それぞれの目線からの震災復興論が語られている。

## 現場実践と研究の融合

復興プロセス研究会は、現場実践と研究との融合を目指してきた。この融合によって、復興の特殊解を一般解に昇華させようとする視点があった。復興の課題は、平時の課題が顕在化したものであるならば、中越の特殊解は、平時の社会課題の解決にも応用可能であろうという姿勢で臨んでいた。

さらに、融合によって、現場実践者が研究者となり、研究者が現場実践者となることで、双方の当たり前の目線を揺さ

ぶる視点があった。ここでは現場実践者が理屈を考え、研究者が現場実践を行い、双方が現場実践と研究を同時に行う者同士として議論を進めてきた。

加えて、融合による分野横断の視点があった。研究会には、都市計画、建築、社会心理、保健福祉、さらには、機械工学等といった多彩な研究者たちが集い、それぞれの目線から復興の議論を重ねてきた。

### なぜ、復興プロセス研究会が必要だったのか

中越地震は、人口減少社会の扉を開けた。期せずして、中越地震の被災地は、人口減少社会のトップランナーとなった。そして復興を測る尺度として人口や経済の尺度が役に立たなくなった。いわば、これまでの右肩上がりの時代の当たり前前の価値尺度が役に立たなくなった。右肩下がりの時代に復興を成し遂げるには、何をすれば良いのか、どんな尺度を持てば良いのかを現場実践と研究の融合、そして分野横断で考えなければならなくなつた。研究会では、現場実践の試行錯誤の積み重ねを研究会というまな板に載せ、現場実践者と研究者が喧々諤々と議論するなかで、その処方箋や評価尺度を導き出す地道な作業を繰り返してきた。それは「見えないものを見ようとす」試みでもあった。この苦悩から生ま

れた処方箋や評価尺度は、地方消滅や地方創生が叫ばれる昨今、人口減少社会を迎えた我が国を照らし出す一筋の光となるだろう。

### 明治大学農学部 小田切徳美教授からの メッセージ

ここで「震災復興が語る農山村再生地域づくりの本質」に執筆いただいた小田切徳美教授からのメッセージを紹介する。小田切先生は、農山村研究の立場から中越地震の復興を長く見つめ続けてくれた。

「プロセス・デザイン派」の誕生

『震災復興が語る農山村再生―地域づくりの本質―』(解題より抜粋)

本書は復興研究と農山村研究の両面で、後世に残る仕事にちがいない。

農山村研究は、ここ数年、厳しい実態に抗して再生に向かった動きの論理を解明し、理論面・実践面で大きく前進した。本書の登場は、その水準を飛躍的に引き上げると言える。それは、本書のサブタイトルにあるように「地域づくりの本質」がいかになく掘り起こされているからである。

当然、それは単なる観察者ではなく、被災者と地域の中で汗をかき、ともに悩

み、希望を捉えてきた著者たちだからこそ可能であった。悲劇の中からのこの大きな前進に対して、著者たちを心より讃えたい。

そして、おそらく本書を読了した読者は気がつくであろう。この本には、タイトルには現れていない通奏低音があることを。それは(中略)著者たちの「プロセスを大切にす」という姿勢であり、そして理論構成である。

復興支援のプロセス、地域の主体形成のプロセス、外部人材の地域定着プロセス、著者たちは、こうしたプロセスを丁寧に解明し、プロセスごとに見えてくること、必要なことをデザインしようとしている。その点で、著者たちの農山村研究や政策提言は、この分野において独自の潮流を形成していると言えよう。それは「プロセス・デザイン派」と呼べるかもしれない。いまや彼らの存在と影響力を無視することができないのは確かである。

本書による農山村研究の「プロセス・デザイン派」の誕生を、畏敬の念をもって喜びたい。

小田切徳美



### 『震災復興が語る農山村再生 ―地域づくりの本質―』

著者 稲垣文彦ほか  
小田切徳美 解題  
発行日 二〇一四年一〇月二三日  
発行者 コモンズ  
価格 二二〇〇円＋税



### 『中越地震から3800日 ―復興しない被災地はない―』

著者 中越防災安全推進機構  
復興プロセス研究会  
発行日 二〇一四年三月二一日予定  
発行者 ぎょうせい  
価格 二二〇〇円＋税予定

平成25年度末に完成し、新潟県下の小中学校および関係機関に配布された「新潟県防災教育プログラム」。これをきっかけに、学校教育現場での防災教育の取組みが定着し、継続して実施されるよう、学校や地域の実状に合わせた「自校化」に焦点を当て、県内の小中学校での先進的な取組み事例をシリーズ「防災教育の現場から」と題して毎号紹介していく。

## ◆実施概要

- 日付：平成26年9月9日(火)  
平成26年10月10日(金)  
平成27年2月予定
  - 対象：新潟市立南中野山小学校6年生(2クラス73名)
  - 住所：新潟市東区中野山863-1
- オリジナルプログラムを検討の上、「キャリア×防災」教育を展開。

## ◆新潟市南中野山小学校区の地理的特性

北は日本海、西は信濃川および新栗ノ木川、南は日本海東北自動車道、東は阿賀野川に囲まれた地域で、中心を通船川が東西に走る。地震のほか、液状化現象、津波などの災害の危険性がある。また、江戸時代は幾度も水害に悩まされた地域でもある。

## ◆新潟市立南中野山小学校の概要

児童数：427人、18学級(平成26年度)  
教育目標：「進んで学習する子 みんなに親切な子 明るく元気な子」

平成二十六年度から新潟県内の小中学校で、防災教育への取組みが必須とされている中、新潟市では「『防災教育』学校・地域連携事業」として、各区から一校ずつモデル校を選定し、八校の小中学校で防災教育の実践を進めている。災害を乗り越えるために鍵となる「共助」を強化し、今後の地域防災の担い手となる子どもたちに対して、自らの命を守るための方法を考える力を培うため、「学校と地域との連携」をキーワードに、新潟市危機管理防災局が事業主体となり、進められている取組みである。

モデル校の一つである新潟市立南中野山小学校では、小学校六年生の総合的な学習の時間を使って、防災教育を実践していくこととなった。

当初、学校の年間計画では、「総合的な学習の時間」を使ってキャリア教育を展開する予定であった。「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、『キャリア』の意味するところ」とある。防災教育における「共助」や「地域連携」といったキーワードを用いて学習することで、「地域社会の一員である自分」についてのイメージを、子どもたちが具体的に捉えやすいのではないかと考えた。

キャリア教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通し

て、キャリア発達を促す教育」である。しかし、キャリア教育も防災教育も「地域について考え、地域でどう生きていくのか」というテーマで考えれば、児童に考えてもらいたいこと、身につけてもらいたい力、学習のねらいは、ほぼ同じであると考えてよい。以上の点を踏まえ、南中野山小学校では「キャリア×防災教育」をテーマにしたオリジナルプログラムを展開していくこととなった(プログラム内容については表を参照)。

第一回目、第二回目と終了したが、アンケートで、災害を自分ごととして捉え、各家庭での備えが必要であると明記している子どもは、全体の約六割にとどまった。第三回目では、残りの約四割の子どもたちにも、日頃からの備えや地域の人たちとの関係性の大切さに気づいてもらえるような工夫をしたいと考えている。

「防災」の視点で「地域社会で生きること」を考えることで、自分や地域の人たちの身を守るだけでなく、今後の自分自身の生き方を考える礎にもなりうる。また防災教育は、キャリア教育のみならず、社会や理科などの既存教科、福祉、環境といったテーマに関連させて実施することも可能である。防災教育とは、「防災」という視点にたった「生き方教育」の展開に他ならない。

(地域防災力センター 関谷央子)

## ◆キャリア教育の定義

「キャリア教育」とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。

キャリア教育は、特定の活動や指導方法に限定されるものではなく様々な教育活動を通して実践されるものであり、一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。

## ◆キャリアとは

キャリアとは、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。(中略)人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。

平成23年1月、中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」より

# キャリア×防災教育：「防災」視点に立った「生き方教育」の展開

## 新潟市立南中野山小学校の防災教育実施における学校のニーズ・状況など

今年度の6年生の総合的な学習の時間のテーマはキャリア教育である。「キャリア×防災」の視点で、「地域について考え、地域社会で生きていくこと」の大切さを学ぶプログラムとしたい。また次年度には中学生になることを考え「プレ中学生」としての意識も持って欲しいと考えている。

### 【第1回】「地域貢献とは何か」（2014年9月9日実施）

#### ①ゲストスピーカーから被災体験談を聞く

「やまこし復興交流館おらたる」のスタッフである川上沙織さん（NPO法人中越防災フロンティア所属）の小学6年生当時に起きた中越大震災の体験談を聞き、災害を身近な出来事として捉えてもらう。



#### ②インタビューで「仕事」について掘り下げる

川上さんが、なぜ生まれ育った山古志に戻り、現在の仕事に就いたのかを取材し、「郷土への誇り」や「地域貢献とは何か」について考えてもらうきっかけとする。



#### ③グループワークで「備え」について考える

地震後、家に備えるようになったものを川上さんに聞いた上で、災害時にどのようなことに困るのか、自分だったらどんなものを備えるのかをグループワークを通して考えてもらう。

### 【第2回】「地域や行政の備えを知ろう」（2014年10月10日実施）

#### ①地域の防災倉庫（2か所）を見学し、地域の備えを知る

地域の倉庫内を見学し、何が、どのくらい備蓄されているのかを確認する。



#### ②新潟市職員の話聞き、行政の備えを知る。

新潟市職員から、新潟市が備えている非常用備蓄品についての話を聞く。

#### ★子どもたちに気付いてもらいたい点

- ・地域・行政共に、全住民の分までは用意していない。そのため、各家庭での備えが大切である。
- ・自分が普段から備えをしておき、災害時に身を守ることが、地域の人を救うことにつながる。（自助ができて共助につながる、自分が備えておくことで地域の備えが必要な人に行きわたる、など）

### 【第3回】「地域で“生きる”こと」（2015年2月実施予定）

○地域住民の意識啓発のため、作成した防災備品チェックリストとポスターを自治会長に贈呈する。

○これまでの学習を踏まえ、以下の点について子どもたちに考えてもらう

- ・「地域防災」において大切なことは何だろう。
- ・「地域で生きること」とはどういうことだろう。

#### ★子どもたちに感じてほしいこと

「家庭での備えをしっかりと自分と命を守ることで、はじめて地域の人を助けることができる」  
「普段から、地域の人たちとの関係を築いておくことで、災害時にも協力することができる」  
（自分の普段の生活が地域社会に影響を与えており、災害時に身を守ることにつながるということに気付いてもらいたい）

# シリーズ 人と人

池谷の分館に入ったきっかけは、成人式の次の日に数年ぶりに盆踊りに顔を出したことです。

地震で地域を離れたから、なんとなく行きづらさがあったけど、行ってみたらすごく居心地がよくて楽しかったんです。それから協力してくれたら嬉しいと声を掛けてもらって、自分が力になれるならと思い、去年から分館に入りました。今年で2年目です。

充さんとは分館のほかにも消防団なども一緒に、頼れる兄貴的存在です。地震前は集落も違って話したことがあったかなというくらいだったので不思議な感じがしますけどね。

自分は20年30年先も行事を続けていきたいと思っています。そのためには仲間が必要です。だから自分がやっていることを同年代に繋げていきたいと考えています。

でもまずは、充さんはもちろん、みんなに認めてもらえるようにやっていきたいです。若いのが入ってよかったじゃなくて、こいつが入ってよかったと言ってもらえるようになるのが目標です。

## 次世代が描く集落の未来



あぜがみ りょう  
**畔上 凌**

長岡市山古志榎木集落出身。地震後山古志地域を離れることになったが地域の力になりたいと平成26年7月よりNPO法人中越防災フロンティアに就職しやまこし復興交流館おらたるのスタッフを務める。

あおき みつる  
**青木 充**

長岡市山古志池谷集落在住。建設業。集落の若手であるが山古志公民館池谷分館長を務める。冬は除雪に従事、夏は牛の角突きの際子など山の暮らしの毎日がある。

山古志の池谷・<sup>ならのき</sup>榎木・大久保集落からなる三ヶ地区は、合同で盆踊りとさいの神をやっている。地震前はそれぞれの集落で出来ていたけど、地震後人数が少なくなって出来なくなったところもあるから、4年前池谷分館長になった時から一緒にやるようになった。反対意見もあったけど、今はみんなが喜んでくれることがやりがいだね。地震後、地域を離れた人もいる。山へ戻って来いとは言えないけど、行事の時だけでも来てくれるのは嬉しい。だから自分が分館長のうちは合同で続けるよ。

凌が分館に入ったことは、ありがたいと思ったね。期待はしている。でも若いからまずは経験。経験を積んで、徐々に頑張ってもらいたい。いずれ事務局的なことを任せてみたい。

この先どうなっていくかは分からないけど、凌やささらに下の世代に頑張ってもらわなきゃならない時代が来る。その世代にも頑張ってもらいたいという思いだね。引っ込めやと言われるくらい下が来てくれればありがたい。



# 『震災学習』を考える

長岡震災アーカイブセンター 山崎 麻里子

「震災学習」と一言で言っても、現在はまだ確立された定義はなく、人それぞれ考え方は違っているとあります。そこで今回は、平成二十六年十月に開催された日本災害情報学会・日本災害復興学会合同大会で長岡において、分科会B「震災学習とそのための手法の構築―東北・中越・阪神の比較より」での討議を基に少し考えてみたいと思います。

「無形・仮設・連携」(東北)、「地域・住民・コミュニティ」(中越)、「洗練・教訓・復興の街づくり」(神戸)といった三つのキーワードが示されました。

また、震災遺構から災害学習を考えたとき「震災遺構」(不動産的建造物)だけではなく、それが存在する「場」が成立し、多くの人が集い震災について考える拠点となるのが大切であるということ、

はじめに、分科会座長を務める坂本真由美氏(名古屋大学特任准教授)より、「阪神、中越地震、東日本大震災、これらの災害後に、ミュージアム(施設)、語り継ぎ活動、記念碑、遺構など災害の記憶をとどめるため、様々なものが作られてきました。そこに残された災害の記憶、記憶などから、どういう学びを得ていくのか、学びを得ることを震災学習と位置づけ、そのための手法を、阪神、中越、東日本の経験から考えることを目的としています」といった発言がありました。

また、震災について学ぶとき、震災後の地域の営みを残した資料だけでなく、震災前からその地域にあった資料(歴史的資料)も共に合わせ観ることで、一連の流れ、その地域の歴史としての震災を学ぶことができるのではないかと言う報告があり、その手法として定点観測や、他の災害経験者、未経験者、震災を知らない世代と触れ合い、影響し合う関係を構築することの必要性があげられました。

その災害学習を考えるに当たり、平成二十五年に開催された「災害かたりつき研究塾」の東北、中越、神戸の三会場における合宿の報告があり、それぞれの被災地か

ら何らかの学びを得ることであり、そのためには学び手側の意識の改革を促すものとして位置付けられる災害の記録・記憶をとどめた多様なメディア(遺構、モノ、写真、言葉、手記など)がないと難しく、またメディアだけではなく学習の

プログラムも重要であるということです。つまり、「何を残すか」ではなく「何をどう残し、そこから何を学ぶのか」、その「学びのプロセス」が重要だとまとめられました。

これを中越に当てはめてみると、中越メモリアル回廊(四施設三パーク)にはや地域住民とその語り、地域の伝統・文化など、多様なメディアが存在し、そこから何らかの学びを得てもらおうための研修プログラムや視察対応が行われていることが重要だと気がきます。

中越メモリアル回廊オープンからこれまで「震災学習」として確立されたものではありませんが、「私たちのきおくを未来へ」伝えてきたことが、震災学習の一つであることを再確認した分科会でした。



中越メモリアル回廊全体図

【雪かき道場 2015】

大雪の中での除雪活動の際には、ボランティアの力はもちろんのこと、ボランティアの安全管理やコーディネートができる人材も必要です。「越後雪かき道場」をそのようなコーディネーターの育成のため、「雪かきの聖地」長岡市川口木沢地区で開催しました。また、例年通り、初心者向け除雪ボランティアの技術講習会のほか、除雪安全という観点から、安全帯の着用実践や、除雪の段取りを学ぶ中・上級コースを設置しています。

◎日程

2015/1/17(土)～18(日)新潟県長岡市川口木沢(初級コース、上級指導者養成コース)

2015/1/24(土)～25(日)兵庫県香美町(初級コース)

2015/1/31(土)～2/1(日)新潟県十日町市池谷(初級コース、中級コース)

2015/2/7(土)～8(日)富山県南砺市福光(初級コース、中級コース)

2015/2/14(土)～15(日)新潟県長岡市山古志(初級コース、中級コース)

◎お問合せ

NPO 法人中越防災フロンティア (TEL:0258-59-2308/E-mail:info@c-bosai-frontier.jp)



「コラム・視点防災」

【中越沖地震で発揮された「市民力」】

中山道の追分宿から分岐する北国街道は、善光寺(長野)を抜け、高田で北陸道と合流、出雲崎へ至ります。佐渡の金を江戸へ運ぶ道として、五街道に次ぐ重要な街道でした。その宿場の一つ柏崎は北前船の寄港地でもあり、人とモノが行き交う交通の要衝・商業の町として発展しました。

2007年7月16日、柏崎を震度6強の激震が襲いました。震源は沖合で近くには、国内最大の原子力発電所がありました。中心市街地に被害は集中、町の特徴であった土蔵がごとごとく倒壊し、土煙が舞い上がりました。

復興への動きは早く、被災した市民自らが立ち上がります。中越沖地震メモリアルはこの「市民力」をテーマとしています。市街地を貫く街道沿いに、風格漂う昭和初期の建築、中越沖地震にも耐えた旧公会堂・喬柏園(きょうはくえん)があります。喬柏園は、地元出身の豪商の寄贈で建てられた「市民力」の象徴といえます。

中越沖地震メモリアルはここに整備される市民活動センターに併設され、地震の経験・教訓とともに、賑わいの再生に取り組む復興の町づくりを伝えます。2015年11月開館予定。

(本部事務局 玉木 賢治)



喬柏園(きょうはくえん)

会員募集中!

当機構では、地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援して下さる会員の方を募集しています。皆様のご入会をお待ちしています。

参加資格: 防災活動に関心のある18歳以上の方なら、どなたでも参加できます。

会員特典: 当機構が主催する研修・講座・イベント等のご案内をいたします。

年会費: 正会員 5,000円 個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 100,000円(1口以上)

※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター  
きおくみらい

【住所】  
〒940-0062  
新潟県長岡市大手通2-6  
フェニックス大手イースト2階  
【開館時間】(入館無料)  
平日 10:00～18:00  
土日祝 10:00～17:00  
【休館日】  
毎週火曜日 年末年始  
【TEL】  
0258-39-5525  
【FAX】  
0258-39-5526  
【E-mail】  
kiokumirai@cosss.jp

おぢや震災ミュージアム  
そなえ館

【住所】  
〒947-0026  
新潟県小千谷市上ノ山4-4-2  
小千谷市民学習センター「楽集館」2階  
【開館時間】(入館無料)  
9:00～17:00  
【休館日】  
毎週水曜日 年末年始  
【TEL】  
0258-89-7480  
【FAX】  
0258-89-7485  
【E-mail】  
sonae@cosss.jp

川口きずな館

【住所】  
〒949-7503  
新潟県長岡市川口中山1441  
川口運動公園内  
【開館時間】(入館無料)  
10:00～17:00  
【休館日】  
毎週火曜日 年末年始  
【TEL】  
0258-89-3620  
【FAX】  
0258-89-3621  
【E-mail】  
kawaguchi-info@cosss.jp

やまこし復興交流館  
おらたる

【住所】  
〒940-0204  
新潟県長岡市山古志竹沢甲2835  
やまこし復興交流館(旧山古志会館)  
【開館時間】(入館無料)  
9:00～17:00  
※2階展示室は10:00～17:00  
【休館日】  
毎週火曜日 年末年始  
【TEL】  
0258-41-1203  
【FAX】  
0258-41-1204  
【E-mail】  
orataru@cosss.jp